

〔書評と紹介〕

稲葉克夫著

「青森県の近代精神」

橋 本 正 信

本書は、昭和六十年九月十日発行の「青森県近代史の群像」の続編ともいべき書であり、構成は大別して、青森県の自由民権家研究と明治のすぐれた政論家陸羯南研究に分かれている。

両書のタイトルに「群像」とか「精神」と銘うっているところに、近代思想史を専門とする著者のこれに一生をかけた心意気を感じる。筆者もかつて、東京の三多摩の豪農民権家を発掘した色川大吉氏の「明治精神史」の中で、「青春群像」とか地下水の如き「精神」の流れという言葉に感動を覚えた。今また、本書の「近代精神」のタイトルに新鮮な響きを感じる。

本書はまた、巻末の初出一覧にもある通り、本誌に昭和三十二年から六十三年までに発表した研究論文七編を基にして、新しい論稿に仕立てている。これらの論文は、その都度、学会に大きな波紋を投げかけたものばかりであった。筆者も、この筆者の精力的な労作に多大な影響を受けた一人である。本書はそれらに新史料や最近の見解を加え、他誌に発表した論稿も入れて、まとまりのある学術書となっている。

本書は三部から構成され、第一部は

第一章 幕末豪農層の意識

第二章 五戸村の自由民権家中市稲太郎

第三章 野辺地村の自由民権家角鹿忠四郎

第四章 本多庸一ノート

となっている。

第一章の津軽豪農層の意識は、幕末から明治にかけて黒石地方の豪農たちの政治への目醒めを、やがてくる明治十年代の自由民権運動の急激な盛り上りの土台としてとらえている。本誌昭和六十三年発表の論文を基にしているが、豪農層の知的土壌をとらえた著者最新の研究で、本県では先駆的な意味をもつといえよう。

第二・三章は、忘れられた自由民権家中市稲太郎と角鹿忠四郎を世に初めて紹介した、著者快心の研究である。本誌で昭和三十九・四十三年に発表した論文を基にはしているが、本書では初形態の論稿となっている。

丁度六〇年安保当時、京都で闘っていた著者が、全国的な帰郷運動で青森に帰り、草の根民主主義を育てようと南部地方をくまなく回り、掘り起した人物である。

二人の名はそれまで、明治十三年（一八八〇）三月十八日の青森県自由民権派蓮華寺集会に、県下三千人有志代表二十一名の中に名を連ねていること、中市は同年四月に青森県代表として元老院に建白書を提出していること、角鹿は同十四年から十八年にかけてのせり（糶）駒（産馬組合）事件で、野辺地組委員として活躍していることしか史料では判明していなかった。

著者は、この根本史料を手掛かりに、困難な調査を根気強く続け、間

接資料や伝聞資料を基に一人のすぐれた人間像を構築し上げたのである。

まず中市稲太郎が何故南部を代表し、津軽の本多庸一と共に、元老院建白書に署名しているか、という素朴な疑問を重視し、彼が代表になり得た理由を説明していく。つまり、中市と盛岡求我社と連なり、特に鈴木舎定との交流があったとし、鈴木が明治十三年十一月の第二回国会期成同盟大坂大会の岩手代表となった時、「青森県三戸郡秋田県鹿角郡六百人代表」も兼ねていたことに着目するのである。また中市は中村敬宇に連なる学統ではないかとし、中市が尊敬していた同郷の鳥谷部健之助が敬宇の同人社に学んでいたことをあげている。また、河野広中の七州準備会参加、二戸の民権家岩館迂太郎との交流も推測し、中市の戒名を民権家の旗手にふさわしいと見るのである。付1〜4に新史料を掲載し、特に中市が捕漁藻税軽減陳情した資料は注目を引く。

次に角鹿忠四郎であるが、非運を共にした従兄弟稲本斉一が東奥義塾の一回生であったとされることから、義塾派との関係を重視し、義塾の寺井純司を通して大井憲太郎の「明法社」との連ながりがあったとする。角鹿の長男彦六が大井の幼名と一致することや、角鹿と共にせり駒事件で活躍した八戸の民権家源辰がギリシア正教徒であり、大井が入信していること、中介者としてニコライ、岩手の鈴木舎定、鵜飼節郎を上げている。

本章の補論も注目を引く。野辺地町「酒屋約定規則」の中から酒屋違約取立人角鹿忠四郎を発見し、彼が法律に詳しい代言人として活躍したのではないかと推測するのである。そして「自由党史」に登場する京都の「酒屋会議」が、アダム・スミスの自由主義経済の理論で、国家が私

事の飲酒に高税をかける不当を難じていることと関連づけるのである。

本・補論ともに、角鹿の中央との連なりを、見事な仮説を立てて評価していくのである。

第四章は、青森県自由民権運動の最高指導者本多庸一研究である。

津軽の生んだ偉人本多については、教育者、政治家、宗教家と三拍子揃った人物としてよく知られている。著者は、本章において、他誌に発表した本多に関する論文を手際よくまとめ、最近発表された諸氏の研究成果を加えて、中味の濃い本多論を展開している。

特に、県会議員として県令山田秀典との交友とその死、保守派の反撃による弘前紛紜事件には新史料を使っているのが特徴である。従来の「青森県総覧」二辺倒でなく、沼田哲氏が樺山資紀関係文書から発見した「本多庸一答申書」の引用や、斉藤康司氏が「明治十四年の笹盛儀助」で佐々木高行日記を掘り起した新説の紹介、「青森新聞」の利用など目新しい。付1〜2で弘前図書館岩見文庫所収の「東北有志会の旨趣」を掲載し、第二章の付4「国会設立につき県同胞への檄文」と共に、研究者への便を図っている。

第二部は九章からなり

第一章 陸羯南小伝——郷土のかかわりを中心に

第二章 羯南聞書

第三章 羯南と徴兵のがれ

第四章 羯南と紋龜製糖所

第五章 羯南とジョゼフ・ドーマーストル

第六章 羯南と無神経事件

## 第七章 羯南の条約改正論

## 第八章 井上外交と自由民権運動

## 第九章 羯南と遼東半島還付責任論

と、著者のライフワーク陸羯南研究の集大成である。

著者は、羯南研究者の多くが、明治二十二年に新聞「日本」で華々しく脚光を浴びてからの羯南を論じている中で、それ以前の特に明治十六年の太政官に入る前後までの不明な点が多いことに着目し、その解明に秀れた論稿を発表した。本誌に昭和三十二〜四十七年までに掲載した論文四編がそれであり、当時の著者と羯南のシュトルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）の時機と機を一にしている。第二部は、これらの論文を中心に新しい論稿に再編成し、本書の柱となっている。目次の重みがこれを物語る。

従って、ここでは本書にとりあげた羯南の自由民権運動とのかかわりだけについてのみ述べたい。

羯南は、明治十三年「陸実」の名で青森蓮華寺の県民権派集会に参加し、二十一名の代表として名を連ねている。青森新聞の編集長として、明治十三年四月十二日の筆禍により罰金十円の刑を受けている。青森新聞に掲載した「非国会論者二告グ」は彼の筆と思われるが、彼は後にこの時期を「身を遊郭におくがごとし」といつている通り、彼の本意ではなかったと著者は考える。さらに羯南には、明治十五年の弘前紛紜事件の時、保守派の笹森儀助に政府側の品川弥二郎を紹介するだけの力があった。

また、明治二十一年の無神経事件では、対外的危機を前に国家の団結

を説き、今、官と民が争うのは愚かであると、双方を批判している事実  
に、まさに羯南のナショナリズムの萌芽を見ている。

第三部は、八戸における昌益発見史である。

昌益研究史は、青森県の戦後の民主主義の象徴といえよう。しかしながら、その研究史に欠かせない人々の努力や業績を無視して、一人歩きしている昨今に警鐘を鳴らす意味でも、本書の最後を飾るにふさわしい論稿となっている。六頁にまとめた小論であるが、簡にして要である。著者が県南に在住していた時期、それはまさに八戸が全国に昌益研究のメッカとしてデビューしていた時にあたる。

本書では、野田健次郎の昌益発見、戦前の発見史、上杉修と昌益研究、渡辺大濤の忠告、八戸社会経済研究会、西村嘉と八戸市立図書館、「昌益未刊資料」の存在、と多項目に涉って述べられており、昌益研究と共に生きた時代の証言者としての説得力を持つ。

なお筆者は、平成四年七月の八戸天望寺昌益シンポジウムで講演し、同年十月の昌益国際フェスティバルのパネリストとして、昌益と秋田比内との連なりに言及し注目を浴びた。

以上、三部から成り立つ本書の概要について論述して来たが、いささか自由民権期の動向に重点がおかれてしまったくらいがある。従って本書に大きな比重を占める陸羯南研究への論評がおろそかになった。著者は、青森県は日本のナショナリズムの温床である。それらの多くは陸羯南に集約されると断じている。それに言及出来る力量は筆者にはない。

しかし、民権運動の研究にいささか手を染めた筆者にとって、本書は、近代精神を民権思想に求め、青森県の近代思想の不稔化現象を中央との

ひまづみの中にとらえながら、一方それさえも地方で空洞化していく現象に警鐘をならしているように思える。

著者の的確な実証的手法と卓越した仮説の設定に敬意を表し、今後は、仮説の証明や著者の残した学問的業績を無にしないためにも、私たちに課された使命は大きいといわねばならない。

（北の街社 一九九二年三月刊、A4版、二九五頁、二、八〇〇円）

（はしもと・まさのぶ 青森県立八戸南高等学校教諭）